

いつからこうして空を眺める事を始めたのだろうか――。

仄暗い室内を僅かに反射している窓ガラスから望む空の色は、既に橙から紫黒を経て漆黒へと変わっていた。

厭きる事なく空を見つめているように見える視線の先には、微かに光が瞬いていた。

けれど、ぼんやりと所在なしに見上げているだけの目には、瞬く数々の小さな光は黒い画用紙に散らした白い絵の具の飛沫でしかない。

そう言えば、と窓ガラスに映る自身を認めて、わたし――八重垣えりか――は初めて今の時刻は何時なのだろうと独りごちた。

自分以外の気配のない暗い部屋を一巡し、丁度月明かりに照らされている壁掛けの時計で止める。思ったよりも回っていた短針があと一時間足らずで日が変わる事を知らせている事に、今日で何度目になるかわからない溜息を吐いた。

続けて癖の強いざんばらな髪を何度かおざなりに掻き上げると、今日も一日何もなく過ごしてしまった自分へ無力さを感じ、再度大きく溜息を吐いた。

唐突に降りかかる変化は望んでいない。

望むのはただひたすらに続く平穩であった。

そのはずなのに。

自身の机の隣にある一切の私物すら置かれていないアミティエの机を見遣る。

無理矢理あてがわれたと思っていたわたしのアミティエ。

実際にそうだった。適正試験の結果、互いに良い適正が出たから、などと——そこまで思っ、考えを止める。

今更そんな事を憂いても詮無き事だ。後付けの文句程意味の無いものはない。

ぼんやりと見つめていた机から視線を外すと、それまでと同じように再度窓から暗い空を見上げた。

居なくなってしまったアミティエ。

その存在の大きさに気付き、自分の想いに気付いたのは、いつだったのか。

変化を望まない自身に大きな変化をもたらし、それを良しと感じ始めたのは、いつだったのか。

境界を越え迎えられた時は、相手の心に触れ戸感った時は、いつだったのか。

何度も記憶を反芻し、一緒に体験した出来事の中で思い出した小さな事も逃さないように、強く思う。

その、繰り返しだった。

当たり前な日常を繰り返す中で、続くと思った存在が消えてしまった現実を認めたくない、強く願った。

けれど、それは叶わぬ願いだとも解っていた。実に都合の良い願い。神の存在など信じてはいないが、それでも縋りたいと思う時もある。

それが、今だった。

「……案外女々しいな」

自身を嘲って呟かれた言葉に、けれど吐き出した言葉程の強さは無い。

堂々巡りを始めている思いを持って余しつつある事はとうの昔に気付いてはいるが、どうにも出来ない事も事実だった。

こんなやり場の無い感情を抱えて、尚、前を見据え歩いている書痴仲間の背を思い浮かべる。

書痴仲間——白羽蘇芳も大切なアミティエを失った。自分よりも酷く。

けれど、あいつの心の澱を餌に焚き付けて無理矢理前を向かせた。

それは間違っていなかったのだと、今でも思う。

事実、短期間にアミティエ失踪の事実の尻尾を掴んでいた。その手腕や真実を間違えず

に探り出す眼識にはいつも舌を巻く。

それに。

かつてわたしのアミティエも言っていたように……あいつには憂いた顔は似合わない。

物憂げな書痴仲間の顔を思い浮かべた刹那、控え目なノックが都合三回、部屋に響いた。この部屋に来る物好きは限られているが、今は誰とも話をしたくなかった。それに、無視を決め込んでも、寝ていたと言えば許される時間帯でもある。

しかし、招かれざる来客は、そんなわたしの都合を無視して遠慮も無く部屋のドアを開けたのだった。

「えりかさん」

思い浮かべていたせい、声まで聞こえてきたのかと耳を疑う。

ふわりと部屋の空気をかき混ぜる自分とは違う知った匂いに、部屋に入って来たのは当人なのだと知った。

窓ガラスに反射する書痴仲間を見遣る。僅かに笑みを湛えた表情に、先程まで思い浮かべていた憂い顔は霧散した。

「返事が無いのに入ってくるなんぞ、随分不躰じゃないか」

「ごめんなさい。だけど、どうしてもお話がしたかったから」

「だから、わざわざ人気がないこんな夜遅くに訪ねて来た、って？」

俯く姿に、反射している姿ではなく当人へと目を向ける。

いつもわたしの軽口に見せる困ったような笑みを思っていたわたしは、予想に反して物憂げに目を伏せる白羽に僅かに戸惑った。

「……………悪い」

どうにも居心地が悪く、反射的に謝罪が口を突いた。

「ううん。えりかさんの言う通りなもの」

小さくかぶりを振ってやんわりと笑う書痴仲間から窓へと顔を向ける。

こんな時間に人の部屋に転がり込んでくる理由など、これからする話の邪魔をされたくない、その一点だろう。そしてこいつの言う「話」とは、既にここには居ないわたしのアミティエの事に違いない。

余計な事を、と内心で毒づく。

放っておいて欲しかった。

こいつが対峙した問題と、わたしが対峙した問題は別物だ。

こいつのアミティエ——勾坂マユリが去った状況と、わたしのアミティエ——考崎千鳥が去った状況は全く異なる。

去ったという事実は同じであれ、理由は違うはずだ。

あいつは——千鳥は、早々にこの学院から立ち去りたい明確な理由を持っていた。その理由が何だったのかまでは今となっては解るはずもないが、立ち去った事実は変わらない。それは勾坂も同じだった。理由は解らない。

その事柄だけを見れば同じ痛みを負ったように見えるだろうが……わたしと白羽とでは痛みの深さが違うのだ。

心を強く通わし合った者を無くす痛み程、わたしの痛みは重くない。

きつと、そのはずなんだ。

だから手を差し伸べる真似はして欲しくない。

わたしなんかは構ってないで、さっさと先行く奴等の所へ戻ればいい。

——お前の居るべき場所は、こ、こじやない。

「……随分前に、泣き出しそうなお前に対して思った事があるんだ」

一人になりたい理由を伝える為に先程まで思っていた事を口にして、沈黙を守ったままわたしを見つめる白羽とガラス越しに視線を交わす。脈絡も無く突然話を振られた事に書

痴仲間小さく声を上げた。

「今すぐにも抱き締めてやればこいつの悲しい顔もなくしてやれる、って。その時は邪魔が入ったけど、何度か……そう思った事がある」

最初は言葉を並べ立てる事が精一杯だった。

聡いこいつには、吐き出した分だけ言葉が届くものと思っていた。

けれど、そんな簡単な感情ではない事を、白羽が纏う空気で知った。

何でもない瞬間に滲む失意と哀切に染まった顔を見る度に、言葉だけでは駄目なんだと知った。

「……ま、結局思っただけで今に至るわけなんだけどさ」

そう、思っただけだった。

柄ではない思いたと切り捨てた。

実際、わたしじゃなくもっと相応しい奴がこいつの側にいたのだ。

……けれど。

「思っただ、白羽。わたしは。お前が負った痛みすら何ひとつ理解なぞしていなかったくせに、おこがましくも救ってやれると思っただ」

背けていた視線を後ろの気配へと戻す。

わたしの話を大人しく聞いていた白羽は、何故か酷く驚いた顔でこちらを見つめていた。そんな様子にどこことなく落ち着かず、視線の合った書痴仲間からすぐ後ろの今は使われていないベッドへと目を移す。

「いつもそうだった。肝心な事は諦めた振りをして思うだけだ。お前のように強くなれない。そんな事しか出来やしないんだ、わたしは」

だからもう放っておいてくれ——最後の方は絞り出すように言葉を吐き出した。

あしろう為に始めた話のつもりが、ただ自分の気持ちを通直に吐露しているだけの事実
に気付き、再度白羽を窺う。表情は、先程と同じ。

じわりと沸いた気恥ずかしさから漆黒の空へと顔を逸らす。

月明かりを反射してくつきりと窓ガラスへ映し出されている部屋の様子が否応でも目に入り、胸の前で強く握っていた手を解いて白羽が何かを呟いた姿を見る。

だが、それはわたしの耳までは届かなかった。

「……………話は終わりだ。一人に、してくれ」

こちらを見つめる白羽から目を逸らしたまま、殊更強く一人を強調する。
察しの良いこいつなら、これで十分解ってくれるはずだ。

少しして、すぐ後ろの気配が動いた。

これでいい。結果として白羽を失望させる事になるのは、この際厭わない。今更なんだ、そんなのは。

不意に身体が揺れて、ガラス越しにあいつを見る。

部屋のドアへ向かったと思つた書痴仲間が、何故かわたしのすぐ傍にいて。

「っ……」

ぐっと強く胸に搔き抱かれた。

思考が追いつかない。

どうしてわたしは、白羽に抱き締められている……？

「抱き締めてやれば悲しい顔もなくしてやれる、のでしよう？」

わたしの疑問に答えるかのように、頭上からそんな囁きが降って来た。

「それ、は」

「私も同じ事を考えていたの。必要だと、思ったから」

やんわりと囁かれた言葉に、意図せず内心を曝け出したと思つた今の話は、単に同情を買っただけなのかと、内で独りごちる。

確かにそうだろう。

聞けば聞くだけこいつの力になれなかった無念を説いただけだ。

だが、違う。伝えたかった事は、それじゃない。

「同情が欲しいわけじゃない」

解ってくれると思つた事に、次第に気持ちさがわめく。

「解っているわ」

「全然解つてないだろ。放せよ……!!」

強く押し返すと、思いの外あっさりと腕が解けて解放される。むしろこちらが勢い良く突き飛ばしてしまつた形になつた。

体勢を崩した白羽は、あと僅かにでも後ろへ倒れたら床へ落ちる、という状態で受け身を取つた所だつた。そのままベッド下まで倒れ込んだら、と一瞬肝を冷やした。が、それは自身の所為だと、今度は頭の芯が冷えた。咄嗟に振り払つてしまつた書痴仲間を窺うと、ほぼ同時に顔を上げた白羽と視線が絡んだ。

僅かに歪んだ表情に、今更だと切り捨てたはずの白羽からの評価を、今度こそ貶めたのだと感じた。謝罪をと思うが口に来なかつた。与えられた善意を突き放した手前、と頭を過ぎつたからだ。

なのに。

「えりかさん」

白羽は、笑っていた。

「大丈夫」

身体を起こして、再度わたしの傍へ。

「聞いて、えりかさん。私は、貴女が思ってくれている程綺麗ではないし、みんなが言う程聖人でもないわ。だって」

放り出していたわたしの手に白羽の手が重なり。

「貴女が傷ついている事を第一に憂うよりも、私を想っていてくれた事を嬉しいと、思ってしまった。そして、そんな貴女を愛しいと、思ってしまった」

と、いつも見せる柔らかな笑みで囁いた。

「貴女が思う私は、決して、貴女を独り占めしたい、だなんて思っていないでしょう？」
「は？」

思ってもみなかった事を口にされ、間の抜けた声を出してしまった。

いや………というか………。

「……冗談、だろ？」

全く似つかわしくない冗句に、乾いた笑みが張り付く。

それは、あり得ない事だから。

わたしの問いかけには答えず、白羽はただいつもの笑みを返してきた。

「おいおい……過ぎた冗談は笑えないんだが」

いまだ追い付いて来ない思考をフルに働かせて白羽の意図を探る。

同情を買ったと思ったあの話が嬉しかったと思う事は、百歩譲って理解はする。

わたしだって、そこまで考えてくれていた事を打ち明けられたら嬉しいと、思う。

しかし、後に続いた一言は毛色が違う。どう考えてもあり得ない事だ。

言われた言葉をそのまま解釈するのならば。

白羽が、わたしを、想った——？。

「……………」

いまだにわたしを真っ直ぐに見つめる白羽と視線が合わさる。

柔らかな笑みは、けれどしっかりとした意思を持ってわたしを見つめてくる。

——冗談じゃ、ないのか……？

「……ふふっ」

不意に、目の前の白羽が声を立てて笑った。……笑った？